荒野のイエス

マルコによる福音書　１：９－１３
ペトロの手紙Ⅰ　３：１８－２１

司祭　ヨハネ 井田　泉

2024 年 2 月 18 日
大斎節第 1 主日

聖光教会にて

主イエスが人々の間で救いの働きを開始される前に、二つのことが必要でした。一つは洗礼を受けること、もう一つは荒れ野でサタンから誘惑（試練）を受けることです。洗礼と試練あるいは誘惑、この二つを経て初めて、イエスはその働きを開始することができたのです。この二つのことが簡潔に今日の福音書に語られていました。

第1の洗礼を通してイエスは、神の愛と神の臨在を経験されました。**「天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを御覧になった」**（**マルコ 1:10**）と記されているように、イエスは洗礼において神の霊を受けられました。そして**「あなたはわたしの愛する子」**（1:11）と呼びかける神の声を聞かれました。洗礼は神の祝福と恵みに満たされる経験でした。

しかしそれに続いて、もうひとつの経験をイエスはなさいます。今度は神不在の経験、あるいは神の沈黙の経験です。

「それから、“霊”はイエスを荒れ野に送り出した。」

マルコ 1:12

もっとギリシア語原文に近くに訳せばこうです。

「それからすぐに“霊”はイエスを荒れ野に投げ込んだ。」

ここから荒れ野の 40 日が始まります。

「イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。」1:13

イエスは荒れ野に投げ込まれ、荒れ野におられます。慰めるものも励ますものも何もない、荒廃した土地、孤独の世界です。

荒れ野の 40 日。そこには神の声は聞こえない。聞こえるのはサタンの声です。だれひとりいない荒れ野の孤独の中で、イエスはサタンの攻撃にさらされる。イエスを誘惑して絶望させ、神の道から引き離そうとする闇の力が襲いかかり、イエスは苦しまれます。

これは暗黒の時です。神は沈黙しておられる。まるで神には人を救う意志も力もないかのように思われる。サタンの目標は、人を神から引き離し、神の道から逸(そ)れさせること。あわよくば人をサタンの道具としてしまうことです。

このような中で神がおられないかのように感じることは、どれほど恐ろしいことでしょうか。

「イエスは四十日間そこに（荒れ野に）とどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間(あいだ)、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。」1:13

荒れ野の野獣とは狼でしょうか。あるいは蛇もいたかもしれ

ません。しかし野獣はイエスを襲うことはしなかった。天使たちが目には見えなくてもイエスを支えていた。神はおられないかに思えたのですが、そこにも神の守りがあったのです。

こうして試練の 40 日が終わります。荒れ野の 40 日を経て、イエスは聖霊の力と喜びに満たされます。ルカ福音書はこう伝えています。

「イエスは“霊”の力に満ちてガリラヤに帰られた。」4:14。

イエスは神の霊の力に満たされた。神といっそう深く交わりを持たれ、強く結びつかれました。荒野は神に至る道となったのです。

主イエスが荒野で 40 日の試練を受け、それに打ち勝たれたことは、わたしたちにとっての救いです。

イエスは、人の経験する誘惑、試練、暗黒をご自身が経験され、それに打ち勝たれた。わたしたちは試練・誘惑のとき、このイエスにすがることができます。わたしたちが誘惑と試練の暗黒を経験するなら、その時、わたしたちはイエスと一体にされます。そしてイエスとともに、試練を経ていっそう神に近づくのです。試練の後に聖霊の喜びと力が、わたしたちにも用意されています。

あの 40 日間、イエスは荒れ野で死ぬほどの苦しみを経験し、その中で切に神に祈られたに違いありません。死ぬほどの苦しみの中での祈り。それはあの受難の前、ゲツセマネの祈りに通じています。そしてさらにそれは、十字架の上での祈りにつながります。

そのようなイエスの祈りは、ただご自分の苦しみに耐えようとされただけの祈りだったのではありません。苦しみもがきつつイエスが願い祈られたのは、多くの人の救いのためでした。その祈りは行動につながります。そこからイエスはだれも行かない所まで行かれます。どこかと言うと、陰府（よみ）、死者の場所、永遠の滅びの世界です。

今日の使徒書ペトロの第 1 の手紙にこう書かれていました。

「キリストも、罪のためにただ一度苦しまれました。正しい方が、正しくない者たちのために苦しまれたのです。あなたがたを神のもとへ導くためです。」3:18

イエスの苦しみは、そしてあの苦しみの祈りも、わたしたちを神のもとへ導くためでした。**「正しい方」**イエスが、**「正しくない者たちのために」**、わたしたちのために、とりわけ救われがたい者のために苦しまれました。

不思議なのはその後の言葉です。

「キリストは、肉では死に渡されましたが、霊では生きる者とされたのです。そして、霊においてキリストは、捕らわれていた霊たちのところへ行って宣教されました。」3:18－19

ここは聖書の中でも特別な箇所なのでよく注意して読みましょう。キリストが肉において死なれたその後、**「霊においてキリストは、捕らわれていた霊たちのところへ行って宣教されました」。**

使徒信経の中にこうあるのをご記憶でしょうか。

「主は……十字架につけられ、死んで葬られ、よみに降(くだ)り、三日目に死人のうちからよみがえり……」

「よみに降り」は、ニケヤ信経にはなくて使徒信経にだけある一句です。死んで葬られた後、三日目に復活されるまでの間、イエスは陰府(よみ)に降(くだ)られた。ペテロは言います。

「キリストは、捕らわれていた霊たちのところへ行って宣教されました。」

「捕らわれていた霊たちのところ」というのは陰府です。死者の世界です。光も希望もない、永遠の滅びの世界、神から断ち切られたと思われる世界です。

「この霊たちは、ノアの時代に箱舟が作られていた間、神が

忍耐して待っておられたのに従わなかった者です。」3:20

せっかく箱舟に入って助かるように招かれたのに、それを拒んで水に溺れて滅びた人たち。その人たちのところにキリストは行かれた。行って宣教された。

暗黒の世界に捕らわれた霊たちのところにイエスは行って宣教された。救われがたい、永遠に捨てられたと思われた人々を喜びの音ずれ、福音によって救うために、天の国に招き入れるために、イエスはその人たちの所に行かれた、とペテロは言うのです。

わたしたちは神を信じることによって救われる。大切なことです。しかし神に出会う機会がなかった人たち、神を信じなかった人たちはどうなのでしょうか。大罪を犯した人たちは、自ら命を断った人たちは、イエスを裏切ったイスカリオテのユダはどうなのでしょうか。

その人たちの救いはあるのか。それは神が決められることです。

しかし、今日わたしたちは聖書から聞きます。イエスはその人たちを招き救うたちにその人たちのところに行かれた。だれも救いから漏れることがないように、イエスはその人たちを迎えに行かれた。

イエスの苦しみの祈りは、イエスを駆り立てて、極みまでの愛の働きへと促したのです。

大斎節の最初の主日に、主イエスが荒野で過ごされたことを心に刻みたい。そして今日からイースターに至るまでのおよそ40 日の大斎節の間、主イエスの道に従う思いをしっかり持ちたいと願います。

祈ります。

主イエスさま、試練のときにわたしたちとともにいてください。わたしたちの経験する荒れ野をとおしてわたしたちをあなたとひとつにしてください。陰府にまで降られたあなたの愛をわたしたちが空しくすることがありませんように。アーメン